

陳祚龍著

## 『漢官七種通檢』

巴黎大学漢学研究所

漢学通檢提要文献叢刊之一

### 大庭脩

漢官七種とは漢礼器制度、漢官、漢官解詁、漢旧儀、漢官儀、漢官典職儀式選用、漢儀の七種の書で、いずれも漢代の制度に關して述べた書物であるが、共に散佚し、類書その他に佚文を見るにとどまった。史記・漢書・後漢書以外によるべき史料の少ない漢代研究者にとって、佚文であってもそれらの書は貴重な資料であるから、輯佚の仕事は早くからなされてきた。本書がベーステキストとしている孫星衍の平津館叢書は、従来の輯佚書の中では極めて信頼度の高いものである。

陳祚龍氏はパリ在住の中国史家で、主に敦煌出土資料の研究者として日本の学界でも知られているが、かつて大陸雜誌に私の論文を批評して下さった事があり、それ以来文通をしてきた所、最近本書の惠贈をうけた。漢代の研究者として注目すべき文献であるので、ここに紹介批評を企てた次第である。

本書は、フランス語及び中国語で記されていることは勿論であるが、自序(仏文八頁・中文六頁)、凡例(仏文六頁・中文五頁)、仏文拼音檢字表八頁、英文拼音檢字表八頁、漢官七種通檢四十頁、漢官七種引書篇目通檢九頁、平津館叢書自序、及び漢官七種本文(甲集十三―十九)三十五頁、地図三葉(前漢拾參部卷百七郡国図・前漢武帝時代亜細亜形勢図、後漢時代亜細亜形勢図、共に箭内互、東洋説史地図より採録)よりなっている。

序文はほぼ漢官七種の解題を内容とし、通檢の本文は画数順に排列され、本書に影印されている平津館叢書の丁数で語句の所在を述べようになっている。

通檢といい、引得といい、索引といい、表記は何ともあれ要するに索引作成の労苦というものは、地道で根気の必要な作業であるために大変なもので、私も藤田至善氏の後漢書

語彙集成の校正に加って身をもって体験しているだけに、陳氏の並々ならぬ努力に、ますます深い敬意を表するとともに、漢代史の研究者にこの様な便利な武器を与えられたことをよろこびたく思うものである。

中国史の莫大な史料を前にして、我々は屢々途方にくれた経験を持つが、この史料の山を崩してゆく武器として索引の効力をしめしたのは、何といっても燕京大学引得群であろう。そして戦後、我が国の東洋学界においては、京大人文科学研究所、平岡武夫教授を中心とする唐代研究の爲の索引シリーズ、京大文学部・佐伯富教授による中国隨筆索引、中国隨筆雜著索引、宋史職官志索引等の編纂、及び、燕京引得を上廻る便利なものをと、昭和十年前後に当時の東方文化研究所で企てられた正史の索引の原稿が、今日出版されつつある所謂「語彙集成」シリーズなど、我々は次第に多くの武器を備える様になって来た。

最近私は、他の必要で仏教經典中の語句を二三調査することがあったが、一、二緒についているものはあるものの、大藏經の索引がなお不備である為に、全く困惑した生々しい記憶からしても、何か索引がないという事(更にいえば文献目録も)は、その学問全体が遅れているという感をまぬがれないと思うのである。

しかし、同時に、右にあげたなどの索引を手にした時でも、この索引さえあれば万全であるというものが有るかといえば、必ずしもそうではない。索引のベーステキストが自分の蔵するテキストと違って直ちには使えないなどという事は未だ騒ぐには当らぬのであって、引きたい言葉が出ていない時は何千頁の索引も紙のかたまりにすぎないことになる。ここに索引の限界があるし、また索引作成の最大の問題点である項目選定の難かきがある。従って、唐律研究会で布目潮瀧氏の試みられた唐律索引稿が、一字索引を立前とされた方法が一番利用者にとって便利だともいえるのである。

さて漢官七種通検の項目は何であるかといえば、官、位、爵、禄、秩、俸、印、綬、その他特殊な意義をもつ字、或いは詞をえらばれ、他は印刷の関係で省略してのせないという立前になっている。特殊な詞といえば、三皇、子弟、諸子、諸父、世卿、仙人、名儒、奴婢等々の類であろうと思われるが、その数は少なく、要するに官制の索引であるといつてよい。漢官七種の性格上これは当然のことであるし、如何に一字索引が重宝であるといつても、すべての書物、すべての索引に適用できるわけでもなく、また索引製作者側からいえば、何処に製作者の見識をしめすかとい

う問題に関連するであろう。しかし乍ら、項目を通覧した結果、若し出来ることならばもう少し特殊な詞を増加してもらえれば更に便利であろうと感じられる点があるように思う。例えば、崇賢門とか、徳陽殿とかいう様な殿門の名前もその一つであるし、明堂とか辟雍なども項目に欲しい。また、禁錢とか銅虎符、竹使符等の漢代の特殊用語も必要であろう。銅虎符・竹使符などは符という項目でまとめもよいと思われる。それから、漢代の制度を漢官七種で調べる時に非常に重要な語として旧制という語が注目されるが、これも項目の範囲外であるのは惜しまれる。又官名に統一されているにしても、古官、周官などという漢代の官を説明している重要な語はとりあげるべきではなからうか。醜を得て蜀を望むといわれるかとは思いますが、改訂の機会には増加されんことを希望する。

更に、漢代制度の研究に資するという目的からいえば、蔡邕の独断も加えて欲しいと思うのである。これは官名の索引という方向からは余り多くの結果を望めないけれども、制度自体の研究には欠くことの出来ないもので、げんに万有文庫本の漢官のテキストには、独断が含まれている。この点、テキストの影印も同時にしなければならぬパリの出版であるから、万事思いがけない困難が有

るとは思うけれども、これまた望蜀の一事として加筆しておきたい。

徒らに注文の多い書評となったかと恐れるが、始めにも書いた様に、索引作成の労力は極めて大きく、しかも批評する者は出来た成果の上になつて注文をつける嫌いがあり、著者の労苦をしらぬ氣に暴言をのべる傾向にある。私はここに改めて陳氏の努力に今一度敬意を表すると共に、漢代史研究家諸彦に対して我々に提供されたこの武器を手もとに備えて、存分に活用せられんことをおすすめして擲筆したい。

Index du Han-Kouan Tsi-Tchong.  
par Chen Tsu-lung.

Travaux d'index, de bibliographie de  
documentation

Sinologiques publiés par l'Institut  
des Hautes

Etudes Chinoises de l'université de  
Paris I.

Envente : Librairie Adrien maisson-  
euve 11, Rue Saint Sulpice, Paris  
(VI<sup>e</sup>)